

「青年海外協力隊による小児がん早期発見キャンペーンの取り組みとジェンダーレポート」

若松 千佐子（ウズベキスタン）

2月15日は「国際小児がんの日」です。日本では例年この日に連動し、小児がん患者やその家族を支援する団体が、主に途上国での小児がんの早期発見を促すためのキャンペーンを世界に向けて一斉に展開しています。途上国では、小児がんの早期診断、情報へのアクセス、効果的な治療体制やケアの不足のため、7~9割の子どもたちの命が失われているという現状があり、途上国と先進国の間にある、小児がん生存率の格差を解消するための基本的アプローチのひとつは、早期発見であるとされています。

このような小児がんにおける現状について、ウズベキスタンの人々に広く知ってもらうために、生活使用言語であるウズベク語とロシア語に翻訳した啓発カードと共に啓発グッズを作成したいと考えています。

青年海外協力隊の活動期間（任期）は原則2年です。ウズベキスタンでボランティア活動をしている協力隊員は、国内各地の医療、教育、福祉、観光機関等に派遣されています。そこで、残りの任期1年をかけて、主に協力隊員が活動する配属先で啓発グッズを配布するという、小児がん早期発見キャンペーンを展開することが出来るように現在計画中です。

さて、今回のレポートではウズベキスタンでボランティア活動する青年海外協力隊員から届いた、当地のジェンダー事情をお伝えします。

・日本語教育隊員

聞く所によれば、ウズベキスタンには約130の民族が住んでおり、民族間で考え方になりの隔たりがあるため「ウズベキスタンのジェンダー観はこうである」と一概に言う事は難しい。ロシア人、ウズベク人の考え方の違いに至っては対照的であるとすら言える。ウズベク人男性は年上の女性を娶る事はまずないが、ロシア人男性はほとんど年齢的な事は気にしない。

一方女性の社会進出、結婚適齢期という観点でもウズベク人女性は非常に保守的で、女性は早婚で主婦になるということがある種の理想像とされている感があるが、ロシア人女性は自立に対して積極的で、結婚はしたい時にするのが当たり前と比較的現代の日本人女性と考え方が近い。

たださえ民族間でこのような考え方の隔たりがあるうえに、世代や出身エリアによって考え方がかわってくるのである。基本的には若い世代で都市部出身である程ジェンダー的にリベラルで、出身地が地方の、特に田舎になるほど保守的になるという傾向がある。

しかしこのような民族、世代、出身地、宗教の違いを越えて共通しているのは「マッチョ文化」である。男性は強くあらねばならない、男は細かいことにゴチャゴチャ言わないなどの、典型的な「男らしさ」を随所で求められる。これはほぼ全ての民族に共通してい

る事で、時代の影響も地域的・民族的な差異もさほど感じさせない。

これらの事を踏まえて齟齬や誤解を恐れずに「ウズベキスタンのジェンダー観」をまとめるのであれば、女性は比較的時代の流れに応じてあり方を徐々に変えて来てはいるが、男性は変化に対して保守的で、社会的地位にあぶれた男性は行き場を失っているという傾向がある。しかしこの傾向も恐らくかなり流動的なもので、時がたてばまた別の形になるのだろう。

・観光隊員

1月14日は「Vatan himoyachilari kuni」（祖国を防衛する人の日）という、カレンダー上の休みではないが、祝日に値するほどの重要な、国を守る人のお祝いをする日である。そして広義の意味では、国を守ってくれる人ということで、男性全般を指し、男性に感謝を表す日と捉えられている。そのため、1月14日は女性から男性へ感謝の意を込めて贈り物をするようだ。これは3月8日にある祝日「女性の日」のお返しの日とも考えられている。「女性の日」には男性から女性に感謝の意味を込め、プレゼントを渡す習慣がある。

・青少年活動隊員

①同僚にかかってきた電話。「何しているんだ！早く帰って家事をしろ！」

②ウズベク人の50代女性の一言。「早く息子を結婚させたい。もう家事はいやよ。」

つまり、結婚すると家事はすべて嫁の仕事なのである。日本人男性が皿などを洗う姿を見て目を丸くしていたウズベク女性の顔が今でも忘れられない。嫁が家事を全てこなすのは当たり前という考えが根強い。仕事の面では、日本に比べプライベートを大事にする考えがあるためか休みが取りやすく、子どもを持つ女性にとっては働きやすいと言える。

・PCインストラクター隊員

男性は職場の仕事が主であるのに対して、女性は職場での仕事に加え、家事全般も負担していることが多い。そのため朝早くから夜遅くまで女性のほうが働いている印象がある。

配属先の小中学校では、高学年を担当する教員は男性が多く、低学年を担当する教員は女性が多い。また、結婚式や職場での食事の際では男女は別であることや、年齢が高いほど余暇などにおいても同性同士が集まって過ごすことが多い。